

最終号を迎えて

人間文化研究所所長 関根靖光

7年前に人間文化研究所の所長に就任して以来、毎年、紀要を発行してきましたが、当研究所の改組に伴い、今回の第8集をもって最終号となります。

私は本学で教育・研究に従事する際に、自分の個人的テーマとは別に、本学の伝統である家政学・生活学の意義や価値の理解に努め、古代ギリシャのクセノポーンの家政論におけるオイコノミア（家政術）をはじめ、そこから発展したエコノミー（経済）、そして19世紀後半に構想されたエコロジー（生態学）、更に凡そ100年ほど前にこのエコロジーの考えを基にアメリカのエレン・リチャーズが提起した Home Ecology、またそこから更にアメリカのコネル大学、ミシガン大学を中心に現在も展開されている Human Ecology など、家政学にまつわるパラダイムの歴史的流れに沿って研究・発表などしてまいりました。

この Human Ecology は、人間と自然・社会・文化の3環境との相互作用を研究する理論面と、その調査・研究を人間生活の質的向上に活用する実践面とを併せ持っており、家政学部と文学部（現在の人文学部）を有する本学を統括するに相応しい総合的な理念として今後の本学の発展の礎とすべき、との認識に至っていた矢先に研究所所長に就任した次第です。しかし研究所の活動が、市民生活と触れ合いながら、市民との連携・協力のなかで進められるにつれ、本学の伝統である家政学・生活学にもっと重心を置いた、市民の生命・生活・人生に深くかかわる研究所であるべきとの新たな確信が生まれ、Human Ecology を「いのち」の方向へ深めた Life Ecology の構想に至りました。英語の Life には、生命・生活・人生といった複合的な意味があり、Life Ecology は、主体を一般市民におき、その Life（生命・生活・人生）と3環境（自然・社会・文化）の相互作用を調査・研究し、市民生活の質的向上に資する実践活動をも行うことと定めて、以後、当研究所を Life Ecology Center のごとく運営し活動してきました。

死生学に関わる数々の講演会、要介護者の QOL をめざす介護家族・医師・訪問看護師・ケアマネジャー・行政担当者らによる研究会、女性の地位向上をめざす計80回以上にわたる男女共同参画基礎講座、被災生活の質的向上をめざす岩手・福島・東京における国際大会などは上記の理念に基づく活動の一端です。

研究所紀要は、学内教員からの投稿論文、研究所が支援する研究プロジェクトの成果論文のほかに、Life Ecology の理念に基づいて研究所が行ってきたさまざまな活動の成果報告等から構成されてきました。この最終号では、学内の5人の先生方からの貴重な研究論文、また昨年5月の福島市と二本松市及び8月に東京の本学で開催した被災生活の質的向上に関わる国際大会の講演・発表などを誌上再現して特集として組みました。

最後に、長期にわたり研究所の活動にご尽力いただいた学内外の皆様がこの場をかりて心より感謝いたします。ありがとうございました。

当研究所が活動理念として掲げてきた、市民の Life（生命・生活・人生、端的にいのち）の質的向上をめざす Life Ecology の理論的・実践的活動を継承する大学・機関があれば、心底賛同の意を表し、今後の発展を祈念したいと思います。